

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
17	高崎健康福祉大学薬学部細胞生理化学研究室
題名 (原題/訳)	
A double-blind trial of gabapentin versus lorazepam in the treatment of alcohol withdrawal. ガバペンチンとロラゼパムのアルコール離脱症状の治療効果の二重盲検法による比較試験	
執筆者	
Myrick H, Malcolm R, Randall PK, Boyle E, Anton RF, Becker HC, Randall CL.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol Clin Exp Res. 33(9): 1582-1588 (2009)	
キーワード	
アルコール依存症、アルコール離脱症状、ガバペンチン、ロラゼパム	
要 旨	
<p><b>緒言：</b> いくつかの抗けいれん薬はアルコール離脱の徴候や症状を改善するが、しかし、予期しない有害作用によって苦しめられる。使用されている抗けいれん薬のいくつかの利点のなかで重要なのは、精神運動性の欠損、認知機能障害、中毒性などの増加をもたらすアルコールとの相互作用がないことである。この研究の目的は、アルコール離脱症状の治療におけるガバペンチンとロラゼパムの効果について二重盲検臨床試験で評価することである。</p> <p><b>方法：</b> アルコール離脱症状治療の外来患者で Clinical Institute Withdrawal Assessment for Alcohol-Revised (CIWA-Ar) の程度が 10 以上の 100 名に、2 用量のガバペンチン (900 mg から開始して 600 mg に減量する群； 1200 mg から 800 mg に減量する群) あるいはロラゼパム (6 mg から 4 mg に減量) を無作為割付二重盲検法によって 4 日間処置した。アルコール離脱症状の程度は、薬物処置の 1-4 日間と処置後の 5、7、12 日の時点で CIWA-Ar によって評価した。アルコールの使用については、口頭の報告と呼気のアルコールレベルで評価した。</p> <p><b>結果：</b> CIWA-Ar の値は全ての処置群で低下した。高用量のガバペンチンは統計的にはロラゼパムより優っていたが (<math>p=0.009</math>)、臨床的にはロラゼパムと同等の効果であった。ロラゼパム処置患者では、薬物用量を低下した 2 日目 (day 2) と処置後 2 日目 (day 6) で、ガバペンチン処置患者と比較して、飲酒の (統計的な) 可能性で高い確率であった。薬物処置後の追跡評価で、ガバペンチン処置患者では、ロラゼパム (<math>p=0.55</math>) と比べて、飲酒可能性確率が低かった (用量 900 mg で <math>p=0.2</math> ; 1200 mg で <math>p=0.3</math>)。また、ガバペンチン処置群はロラゼパム群と比べてアルコールで生じる欲求や不安、鎮静の程度が低かった。</p> <p><b>結論：</b> ガバペンチンは高用量 (1200 mg) を処置されたグループで、耐容性があり、アルコール離脱症状を効果的に減少した。ガバペンチンは、ロラゼパムに比べて、アルコール離脱期間と離脱後早期での飲酒可能性を低下させた。ガバペンチンはアルコール離脱症状の治療に効果的である。</p>	